

第7章 文化的景観の価値と特性

第1節 文化的景観の特性

前章までの調査成果をふまえ、蘭島及び三田・清水の農山村景観の価値、特性について以下に記述を行う。当地域の文化的景観は、通例の自然的特性、歴史的特性、社会的特性の他、視覚的特性を加えた4つの観点からその特性を把握することができる。

1. 自然的特性

蘭島及び三田・清水の農山村景観は、有田川上流域に位置し、周囲を長峰山脈や白馬山脈といった山頂標高400～600m代の急峻な山地に囲まれた山間部に存在する。この景観の骨格を形成した有田川は、高野山の南側にある揚柳山（標高1,009m）から南西に発し、山間部を蛇行しながら紀伊水道へと注ぐが、上流部のかつらぎ町梁瀬から蘭島付近にかけては急峻な山間を大きく曲流することによって典型的な穿入蛇行が発達し、河川沿いには河岸段丘が発達している。穿入蛇行の地形は、紀伊半島でも日高川や熊野川、日置川でみられる他、静岡県の大井川本流や高知県の四万十川等でも存在しているが、蘭島とその周辺部のように河岸段丘が形成された地域は全国的にも少ない。これは、地質との関係によるため、蘭島より上流側では砂泥岩主体の地質で構成されているために側方侵食によって河岸段丘が発達し、縄文時代から人々が活動する場を与え、有田川上流域の文化の発展の中核となる基盤を形成した。また、蘭島では特に曲流が著しく、ヘアピン状のきれいな対称をなす扇形の特徴的な段丘地形が形成されたが、江戸時代初期に水田化されたことにより、全国的にも希有な棚田景観が生み出され、審美的な価値も高い。

当地域では、古来より自然条件に適合した農林業を主体とした生業や産業を営む中で、当地域固有の文化的景観を形成してきた。傾斜地が大半を占める当地域では、段丘面や山地の緩傾斜面を石積みや土坡によって整え、自然地形に沿って棚田をはじめとした農地や居住空間を確保した結果、河川、農地、集落、里山という連続した俯瞰景をもつ一体性の高い農村景観が生み出された。今回の調査において、農地と疎林が接する環境に依存し、全国的にも数が減少しているオオチャバネセセリ（和歌山県レッドデータブック絶滅危惧Ⅱ類）が確認されたことは、農地—里山の連続した環境が良好に保たれていることを証明している。また、当景観の景観要素として欠くことのできない石積みや強固な土の畦畔は、最も植物種が多く確認され、生物の多様性を高める大きな役割を果たしていることが明らかとなったが、その中でもアマナの大きな群落が連続して形成されていることや和紙の原料となるヒメコウゾなどが特筆される。

大部分を森林が占める自然環境にあって、まとまった面積の水田が維持されていることは、湿草地及び低茎草本草地の環境を生み出し、生態系の維持や生物多様性を高める大きな要因となっている（図7-1）。ノビタキやタヒバリ等の草地性の渡り鳥が中継地として利用し、日本最小のネズミ類であるカヤネズミが営巣していることについても、長期間にわたって水田と周囲の自然環境が維持されてきたことを傍証している。また、水田そのものについても、かつては山間地の水田環境に普通種として存在したツチガエル、トノサマガエル、アカハライモリ（いずれも和歌山県レッドデータブック準絶滅危惧種）といった個体数が極めて多く生息し、植物ではホシクサが見られるなど山間地の水田環境が良好に保たれていることが明らかになった。

蘭島を中心とした文化的景観は、砂泥岩主体の地質構造と有田川の浸食作用によって発達した

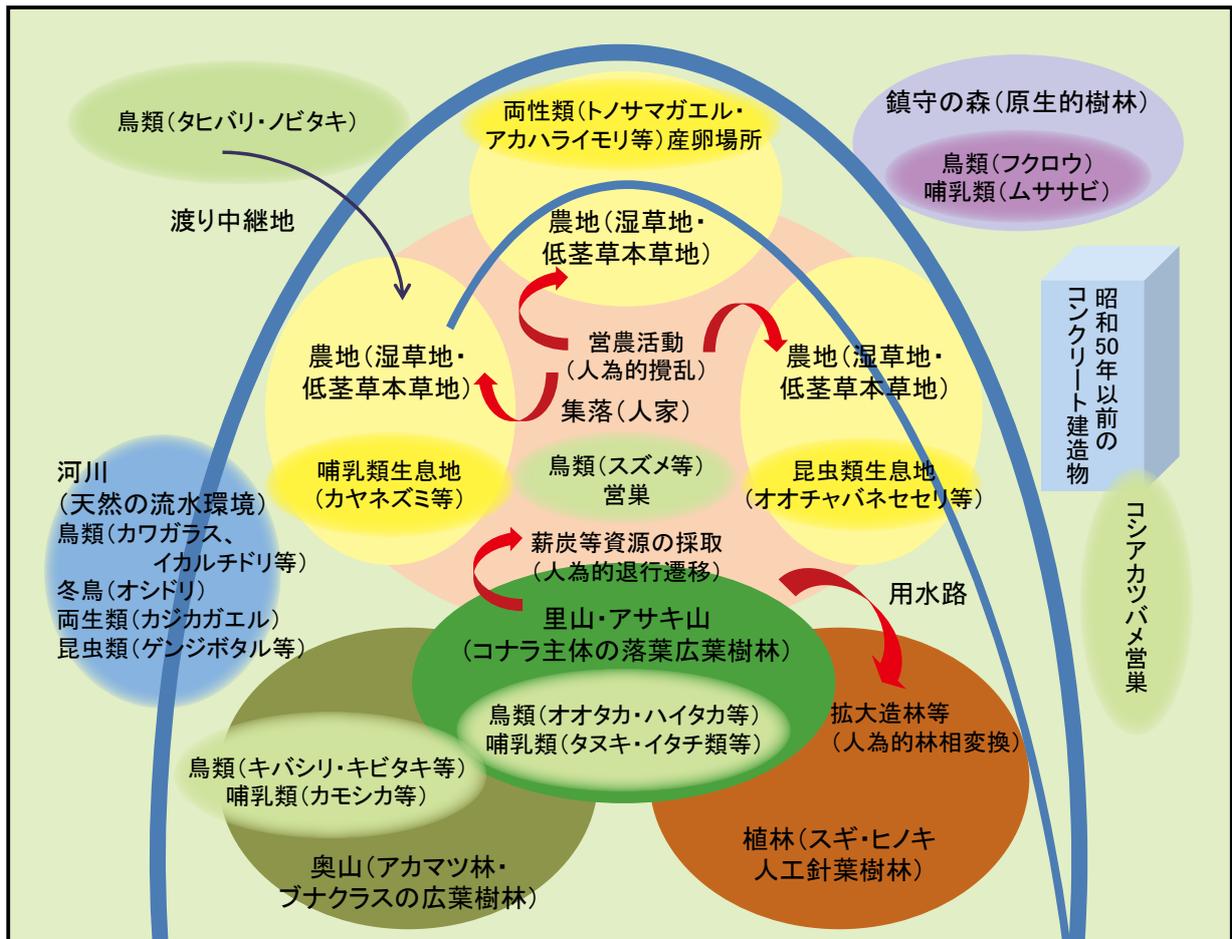


図 7-1 動物相の生息環境模式図

河岸段丘地形を基盤に、人々は農林業を主体に自然を尊重した働きかけを行った。河岸段丘を形成した有田川をはじめとした自然の水の流れと、農業用水や生活用水をはじめ、自然の水の流れを巧みに利用した人々の生活と生業活動という人と自然の相互作用によって形成された当文化的景観は、自然地形に沿って連続する一体性の強い農村景観を生み出し、蘭島という独自性の高い棚田景観を中心とした全国的にも希有な農村景観の一つを形成した。その文化的景観は、人と自然の共生の象徴と呼ぶに相応しい存在であり、多様な動植物が棲息生育する環境を保全していることも、文化的景観の価値を高めている。

2. 歴史的特性

当地域における文化的景観の形成は、約 4000 年前の縄文時代後期に遡る。当該期の実態は明らかではないが、有田川での漁労や周辺の山林で食糧生活資源を利用していたことが推定され、人間による自然への働きかけが始まった。

当地域は、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の主要資産の一つである高野山の山麓に位置する（図 7-2）。河道付近や山上の尾根伝いには、高野七口の一つである高野参詣道が通り、高野山の開創後は、木材の供給をはじめとした山上の宗教活動を支える一方で早くから仏教文化が流入し、その影響を強く受けてきた。平安時代後期には、長久 3 年（1042）の高野山文書に湯河原という名の村が登場し、そこに比定される清水区西原地区の湯子田においては、湯川川より取水した「下湯」と呼ばれる灌漑を行い、既に水田経営が行われていたと考えられる。

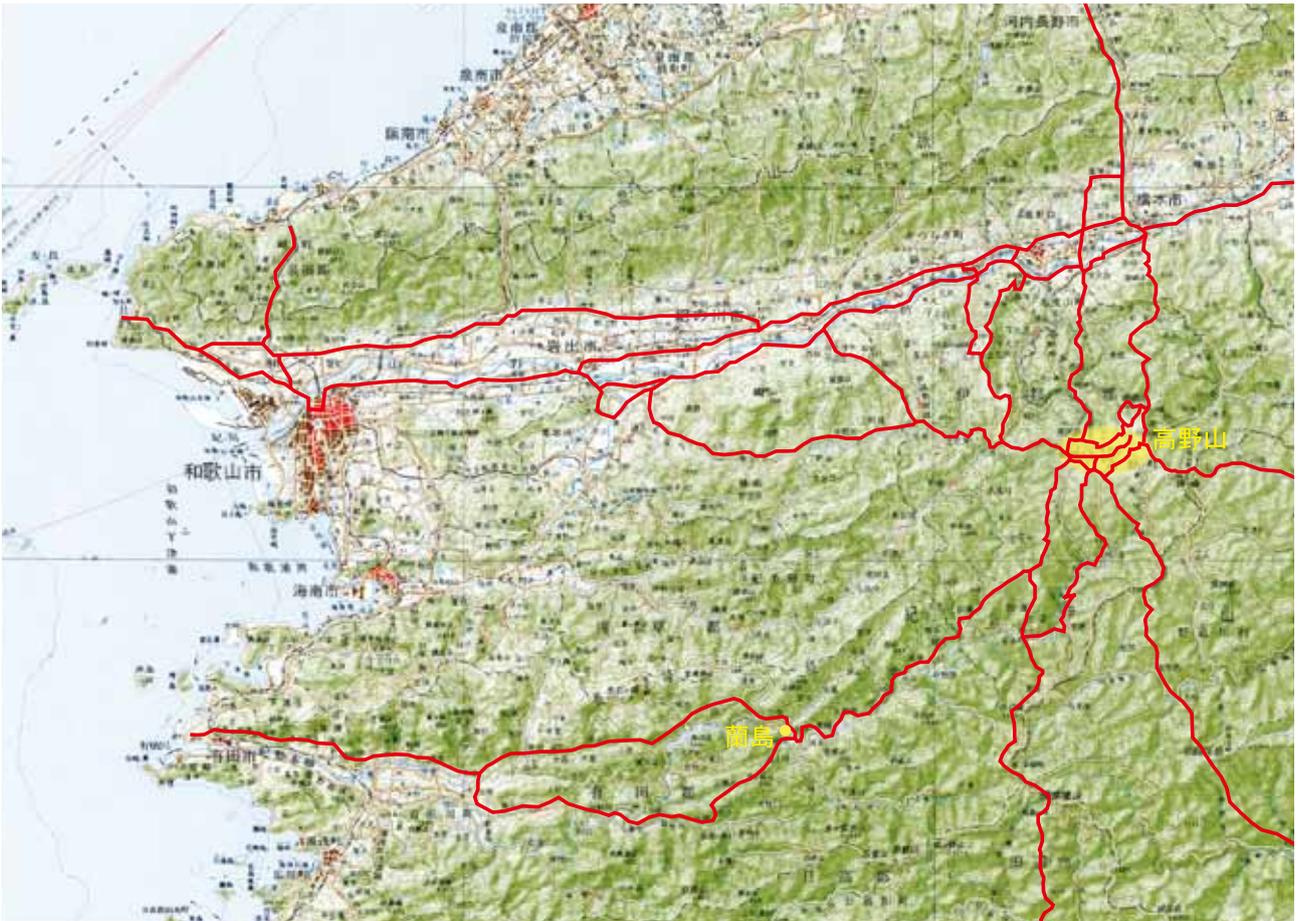


図 7-2 高野七口及び高野参詣道と蘭島の位置関係

また、中世には本家円満院（三井寺）、領家寂楽寺（白川喜多院）、地頭湯浅党が統治する阿弭河荘という日本史上著名な荘園に含まれ、「ミミヲキリ、ハナヲソギ、カミヲキリテ・・・」というたどたどしい仮名書きによって残忍な地頭の横暴を荘園領主に訴えた建治元年（1275）『阿弭河荘上村百姓等片仮名書申状』が書かれた舞台であり、このような中世荘園の開発過程の中で現在に至る農村景観の基礎が形成された。13世紀には、大規模な百姓逃亡や流民が発生し、集落自体が消滅するような大規模な自然災害が存在したことが史料から確認でき、有史以来繰り返し起こる自然災害と復興の歴史を読み取ることができる。

このような歴史経過の中であって、蘭島が位置する場所は、東西の高野参詣道と南北の龍神街道が合流し、蘭島を取り囲むように東に小峠城、清水城、南に西原城といった中世城郭が密集して築かれているなど、交通・軍事上の要衝地帯であった。日常の生活空間の外側は、神々の支配する自然の領域であるとする「異界」の観念が存在した中世期であって、蘭島の中に中世段階の石造物が建立されていたことは、そこが阿弭河荘上荘、下荘の荘園境や、日常と非日常といった境界地帯という性格を有していたことを物語るものであり、石造物が生活空間と異界空間との領域付近に建てられた可能性を示している（図 7-3）。西原地区のフキの峠に建つ石造物は、それを顕在化している事例である。

以上のように中世的な空間利用に対し、近世になると有田川やその支流では川の井関より引水した長距離型の灌漑用水路が整備され、大規模に畑地が水田化される一方で、蘭島をはじめとした中世の異界空間地に対しても新田開発が段階的に進められた（図 7-3）。当地域における耕地開発については、概ね 17 世紀から 18 世紀の初頭には達成されたが、これにより中世阿弭河荘に開

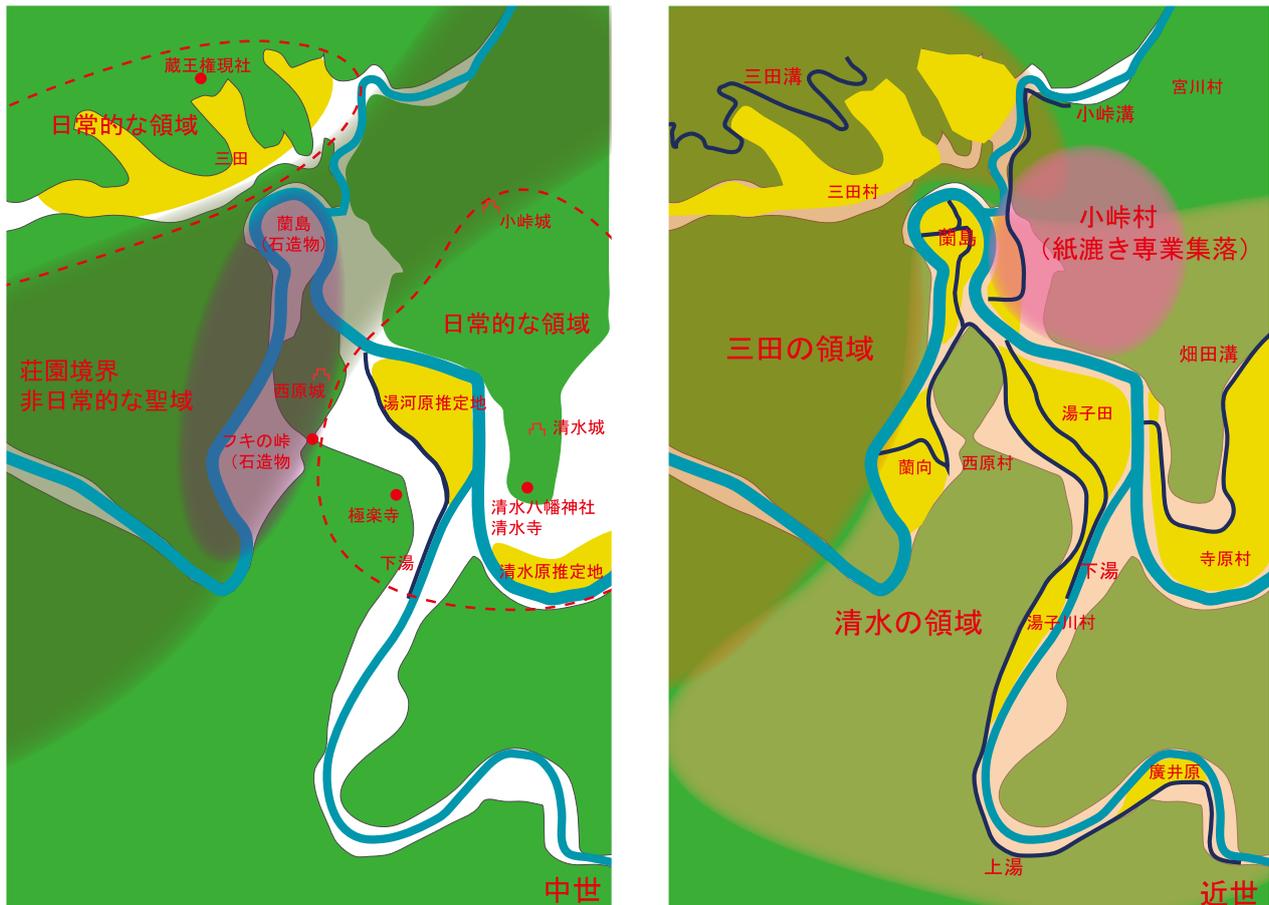


図 7-3 中世から近世への空間領域の変遷模式図

発起源を有する西原集落、三田集落に加え、近世に起源する小峠集落、蘭向集落、蘭島など現在の土地利用の在り方に通じる農山村景観が形成された。これら当地域の開発に尽力したのが、山保田組の初代大庄屋であった笠松左太夫である。笠松左太夫は、蘭島をはじめとした新田開発の他、中世まで荒地であった小峠つぶら野において、集落や紙干し場、耕作地などを新たに開拓し、紙漉き集落を形成することによって、現在にも継承されている保田紙生産の基礎を築いた。笠松左太夫による一連の開発については、残された諸史料からその年代を明らかにすることができ、蘭島の上湯水路は明暦元年（1655）の開削年代が特定できる。棚田や集落の開発過程や時期が特定できる事例は、全国的にも極めて稀であり、この点は当景観の有する大きな特性の一つである。

近代以降は、農林業を主体に紙漉きを副業とする生業活動を通じて、緩やかな景観の変遷を遂げてきた。当地域では毎年のように風水害を被る災害常襲地域であったが、かつては河川の氾濫時にウナギなどを捕ることにも利用された川田をはじめ、水害を見越した人々の生活がそこにはあった。しかし、明治 22 年、昭和 28 年、平成 23 年と約 60 年おきには、人知の想像を超える大水害が発生しており、その中でも昭和 28 年の大水害は、当地域の生業や景観、生態系を劇的に変化させる大きな時代画期となる歴史事象である。当文化的景観は、度重なる自然災害に対する人々の復興活動等、不断の努力によって維持継承されてきたものであった。

3. 社会的特性

当地域の主要な生業は古来より稲作であり、近世にその基礎が形成された農村景観は、現在まで継続的に営まれてきた営農を通して受け継がれてきた。当地域では、古くから水田への用水

路は「湯」と呼ばれ、各湯ごとに「田人(たど)」と呼ばれる水利組合を組織し、田人親の下で水路の維持管理が行われ、「湯山」と呼ばれる共有林を保有して木材の切り出しにより柴堰の補修や、木材の売却により田人の運営費にも当てられていた。蘭島に用水する「上湯田人」では、現在も部頭（水利組合長）のもと、水守を定め、水路の補修や清掃、管理を共同で行い、田への水入れや水落としの日取りも決められ、同時に行われている。このように、用水系統や田越しの灌漑、田人と呼ばれる水利組織など伝統的な水利慣行が今も継承されていることは、当景観の特性の一つである。

当地域では、長い年月をかけて人々の間に受け継がれてきた自然に対する豊富な知識を基にして、土地利用や生業活動、生活物資の獲得など、人々の暮らしに活かされてきた（図7-4）。生業では、稲作のみならず、時代の変化に合わせ、林業や製紙の他、多様な生業を組み合わせる生計を成り立たせてきたが、耕地が限られている当地では、田の畦畔や「サエン（菜園）」と呼ばれる屋敷地周辺の畑や後背斜面、集落周辺の緩斜面や傾斜度が30°を越す急斜面も山畑に利用し、コウゾや茶、シュロ、山椒などの換金作物が植えられた。棕櫚や和紙は現地加工を行わず、長峰山脈を越えた野上谷や海南の加工場へ運搬するという広域的な産業構造が特徴であったが、これら紙漉きの原料となるヒメコウゾや今も寿司の巻き葉として利用されているバショウ、棕櫚縄の原料となる棕櫚山の存在は、当地域固有の独自性のある景観を構成し、現在では日本一の生産量を誇る山椒畑が新たな景観を生み出している。また、面積の約90%を山地が占めるこの地域では、

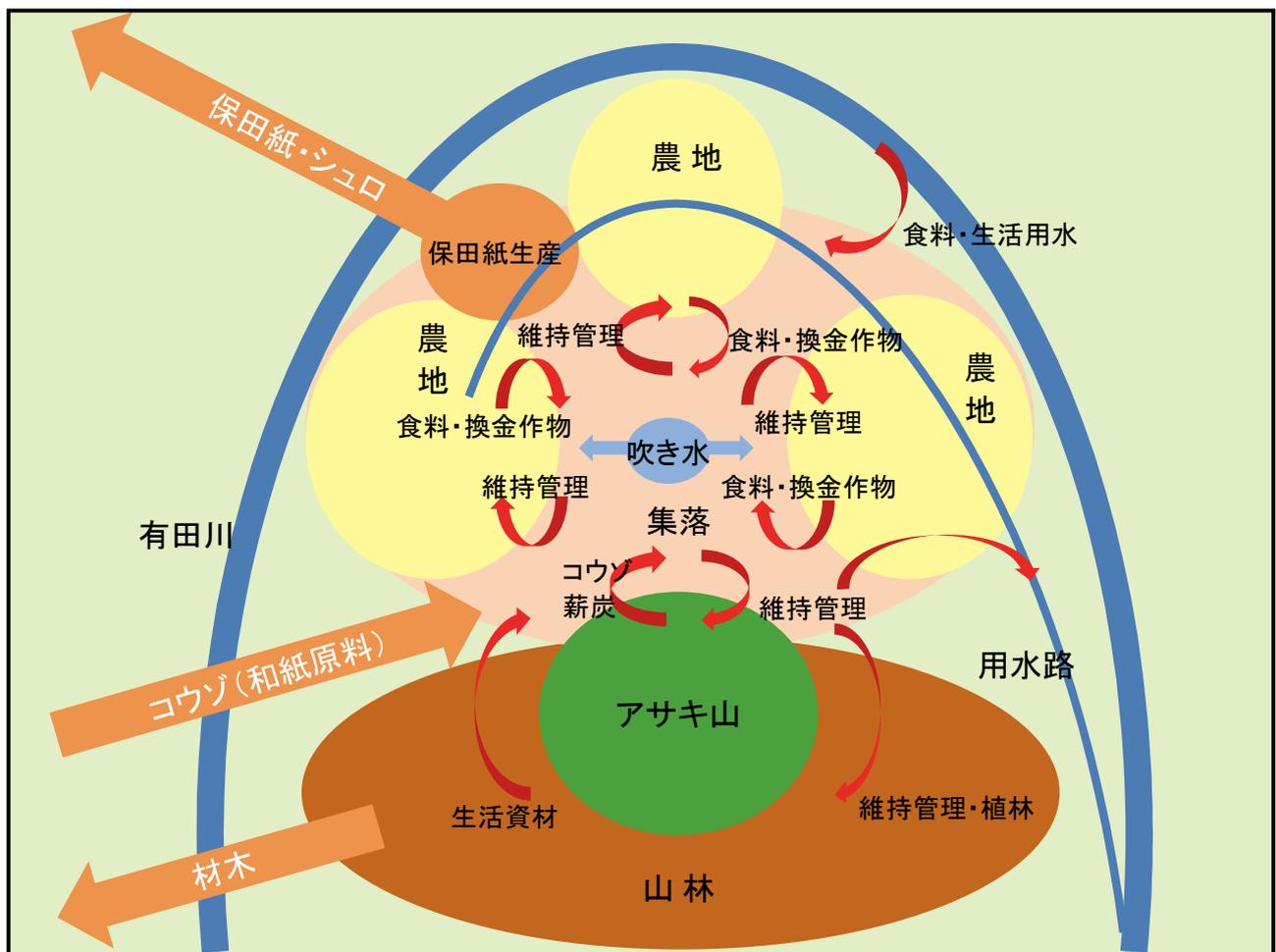


図 7-4 生業構造模式図の一例（西原地区）

豊かな森林は共有の財産として「アサキ山」と呼ばれ、山菜や堆肥、薪の採取や製炭に供されてきたが、暮らしにおける雑木の利用活動が多様な生物が棲息生育する環境を形成してきた。

近世にその生産が開始された保田紙は、江戸時代後期に編纂された『紀伊国名所図会』にも描かれ、かつては当地域の冬の風物詩であった。明治時代以降は、主に海南市内海で製造された和傘の傘紙を中心に生産し、明治末期には最盛期を迎え、昭和20年代まではこの地域の主要な生業の一つであった。保田紙の生産は、昭和28年の大水害で壊滅的な被害を受け、ビニール傘の普及により傘紙の需要が減少し、昭和40年代には一端その生産は途絶えたが、昭和54年以降、町施設において復活し、その伝統が受け継がれている。現景観との関連が希薄になったとはいえ、かつての保田紙生産に携わった人々の作業の様子や紙漉唄、紙素叩きの音、屋敷の庭や集落の道路沿いに展開した紙干しの風景は、過去の景観のみならず、現在の景観や将来の景観を考える上でも重要な要素の一つである。

集落の形態は水との関係性が強く見られ、谷水が豊富で利水しやすい三田集落では家屋が散在するのに対し、吹き水（湧水）を用水源とする西原集落では家屋がまとまって形成されているなど、複雑な水の流れに適合した集落形成が認められる。伝統的民家では、比較的降雨が多い当地域の風土に適合した傾斜度の高い茅葺き民家が残り、狭小な敷地に適応した分棟形式の建物配置がみられる。主屋は、取水方法や利水方法による方位設定があり、取水の上手に水まわりが設けられ、下手側に作業用のニワをもち、山を背負い、川や谷川に開く構成がみられ、付属屋として納屋や土蔵、紙漉小屋の他、吹き水（湧水）や谷川を利用した水溜めが配されている。水溜めは生活用水の他、紙漉きにも利用され、かつての人々の暮らしを今に伝えている。主屋、付属屋によって囲まれた空間では、各種農作業の他、コウゾの集積や紙干し場としても広く使用され、生業に密接した居住空間が展開していた。

当地域では、集落の各所に多様な信仰形態が存在し、亥の子などの農耕儀礼をはじめ年中行事が今も数多く継承されているが、その中でも節分にイタドリの枯柴を道の辻に積み上げて焚き、邪気邪霊を追い払い、無病息災を願う「鬼追いドンド」と呼ばれる習俗は、地域固有の特徴的なものである。各集落が管理する小社やお堂においても、今も餅まきをはじめとした会式が継続して行われており、地域共同体の紐帯を強めるとともに、景観を支える大きな役割を果たしている。当文化的景観では、多様な有形要素に加え、これら景観の背景に豊富に存在する無形の要素が重層的に融合していることも大きな特性の一つである。

4. 視覚的特性

蘭島を中心とした文化的景観は、視点場が極めて限定的であり、その視点場から眺める景観は、一定の距離を持った見下ろしの「中景」となるが、蘭島が扇状のユニークな形状をしたまとまりのある小さな塊状の棚田景観であるため、人々が一団の形として全体の棚田群を認識し、記憶し、対象化できる景観である。また、その景観は単に蘭島の棚田景観だけではなく、その周囲や後背に遠方の奥山をはじめ、里山、集落、前山、河川、近代的な道路等の多様な要素が目に入り、農山村のあらゆる要素が同じ視野の中に含まれ、中山間の農山村全体を俯瞰するような多様な背景を伴った棚田景観として一体性のあるものとして認知される。蘭島を中心とした文化的景観は、広大で壮麗な景観ではないが、小規模で景観的なまとまりがあるため、認知しやすい形で農山村景観の総体を一望でき、楽しみやすい環境を有していることが当文化的景観の特性の一つであると言える。

第2節 文化的景観の本質的価値

以上のように、有田川上流域の地形や気候、水環境、地域資源などの自然条件を活かした生業活動や土地利用を行うことによって形成され、現在まで維持継承されてきたのが当地域の文化的景観であり、蘭島及び三田・清水の農山村景観の本質的な価値は、次の5点に見いだすことができる。

① 人と自然の相互作用によって形成された独自性の高い農山村景観が維持されている

蘭島を中心とした文化的景観は、大部分を占める山間地とその山間を曲流する有田川の流れによって形成された特徴的な河岸段丘地形を基盤に、農林業の他、谷水や湧き水、河川水など良質で豊富な水環境とコウゾ栽培に適した霧が発生しやすい気候条件を活かした紙漉きを副業とする人々の自然条件に適合した生業活動の結果、蘭島に象徴されるような自然地形に沿って連続する一体性の強い農山村景観が生み出され、現在も伝統的な土地利用が継承されている。

② 一体性のある農山村環境の中で多様な生態系が維持されている

急峻な山地に囲まれた当地域では、文化的景観の大部分が山間地によって占められているが、まとまった面積の棚田（水田）が湿草地及び低茎草本草地の環境をつくり、また棚田造成のために構築された石積みや土坡は、希少種を含め、多様な動植物が棲息生育する環境を生みだし、生態系の維持や生物多様性の基盤となっている。

③ 歴史的に重層性のある景観が残されている

当地域の文化的景観は、中世阿豆河荘という著名な荘園開発を起源とする農山村景観、蘭島をはじめとした長距離用水路と新田開発、紙漉集落の形成という近世の笠松左太夫による一連の開発に起源する農山村景観、近代の電力需要の高まりから建設された水力発電施設、昭和28年の大水害をはじめ、有史以来度重なる自然災害と向き合い、繰り返されてきた復興景観等、各時代においてある必然性をもって形成された多様な有形の要素が重層しつつも、それらが総体としてまとまりのある一体性の高い景観が展開し、現在まで継承されている。

④ 伝統的な水利慣行や風習が色濃く残る

当文化的景観の主体となる構成要素である棚田（水田）や用水路は、当地域の生業の歴史を表す重要な要素であるが、特に上湯用水路は史料によって開発過程や年代が特定できるとともに、田人と呼ばれる伝統的な水利組織や用水系統、田越しの灌漑システムなど伝統的な水利慣行によって今も継承されている。また、当地域では、会式や年中行事等の伝統行事、習俗が数多く存在しており、これら無形の要素は地域共同体のコミュニティーを維持し、人々の生活や景観の形成を支えてきた基底の要素となっている。

⑤ 農山村景観の総体を一望できる認知しやすい環境がある

固定的な視点場を有する蘭島を中心とした文化的景観は、蘭島が扇状のユニークな形状をしたまとまりのある小さな塊状の棚田景観であるため、人々が一団の形として全体の棚田群を認識し、記憶し、対象化できる景観であり、またその景観は単に蘭島の棚田景観だけではなく、その周囲や後背に農山村のあらゆる要素が同じ視野の中に含まれ、中山間の農山村全体を俯瞰するような多様な背景を伴った農山村景観の総体を一望できる、楽しみやすい環境を有している。